

演題名：選択的卵管造影検査の有効性について

演者名：徐 東舜

抄録本文：

【目的】従来の子宮卵管造影検査は異常所見である卵管閉鎖となる擬陽性率が高いことが知られている。一方、選択的卵管造影検査は、それぞれの卵管別に造影検査する事から、子宮卵管造影検査よりも優れていることが示唆されてきた。そこで今回、当院では選択的卵管造影検査を子宮鏡下に行い、その有効性を検討した。

【方法】当科不妊外来に初診で来院された患者の中で、前医で子宮卵管造影検査を行った482例（平均年齢33.8±3.9）を対象とした。選択的卵管造影検査法は、先ず子宮鏡（オリンパス HYFTYPE XP）を子宮内腔に挿入し、生食で還流しながら内腔観察後、左卵管に子宮鏡のチャンネルロから造影カテーテル（オリンパス PR-22SV）を卵管口に挿入し、造影剤のリピオドールを0.5ml注入後、さらに生食1.5ml追加注入した。その後、右卵管についても同様の処置を行い両側卵管の疎通性を確認した。そして、これらの結果を事前に前医で行った子宮卵管造影検査の結果と比較検討した。片側卵管閉鎖あるいは両側卵管閉鎖を異常所見とした。

【成績】他院、当院の検査で異常の割合は18.6% (90/482) vs 12.7% (61/482)となり、当院での異常の割合が有意に低かった。他院で異常所見があり、当院で正常であった割合、つまり擬陽性率は72.2%(65/90)であった。他院で一侧閉鎖あるいは両側閉鎖別で、当院で異常所見がなかった割合は、それぞれ69.0% (40/58)、78.8%(25/32)とやや両側閉鎖の方が擬陽性率は高かった。

【結論】子宮卵管造影検査で異常の結果が出た場合、選択的卵管造影検査で再検する事が望ましいと考える。